

千葉大学教授 古在豊樹

# 幸せの芽を伸ばし育てるようになり 園芸学者的幸福論

植物工場システムの開発など、植物環境学の分野では日本における第一人者的存在の古在豊樹・千葉大学教授。最近、著書を通じて環境や貧困問題に対する提言を行なっているほか、自身のこれまでの経験から得られた人生の正しい歩き方ともいうべきメッセージを発信している。氏は、少年期の過酷な社会的差別と経済的困窮の中にあっても、動植物がパートナーとなり、フェアな心のあり方を身に付けていったという。園芸学者であると同時に教育者でもある氏は、変わりゆく日本社会と農業、そして幸福をどのようにとらえているのか。

## 価値観が変わりつつある 社会の中での農業

**昆吉則**（本誌編集長） 古在豊樹先生は施設園芸学の第一人者であり、本誌読者の中にも先生の講義を受けたという方も多いのではないのでしょうか。また最近では、2冊の書籍を立て続けにお出しになるなど、社会に向けて様々なメッセージを発する活動もされています。今回、お話を

うかがおうと思ったのは、「幸せの種」はきつと見つかる』を拝読しまして、「あなたはどうか死にたいのですか？」言い換えれば「どう生きようとするのですか？」というメッセージが伝わってきました。

**古在豊樹**（千葉大学教授） それはありがとうございます。

**昆** 先生は子供の頃から、草花と親しんで来られたのですね。

**古在** ええ、私の父親（古在由重氏）が自分の生き方を貫いてきましたか

ら（編集部註・由重氏はマルクス主義哲学者で戦前戦中に治安維持法で検挙され、戦後もGHQによって公職追放された）、当時子供だった私も村八分状態だったんですね。それで、半ば必然的に動物や植物と親しむことが多かったのです。また私自身が病弱でしたので、常に死というものを意識させられていました。

**昆** その時に様々なことをお考えになったのですね。

**古在** そうです。自分が何者であるのかと考え、自分が死ぬまでに世の中の役に立ったという実感を持ちたい、普段親しんでいる草花の命を助きたいという気持ちが芽生えてきたのです。もちろん、今の年齢になって振り返ってみると、という話ではありますけれど。しかし、幼い頃に純粋に生きていくことの意味を考

えたいという気持ちを持ったのは確かですね。

**昆** 以降、研究者を一筋に目指されたわけですか？

**古在** いいえ、私は農業をやりたいと思っていました。ただ、当時、私が農家になるとすれば、海外移民かあるいは農家の婿養子になるしか選択肢はなかったわけですね。しかし、いずれも現実的ではなかったため、気持ちを切り替えて、農業をサポートする側に回ろうと思い、研究者の道を選びました。

**昆** 施設園芸を専攻された理由は？

**古在** その当時、施設園芸農家が最も貧しい境遇に置かれていたというのが大きいですね。

**昆** しかし、社会が豊かになると同時に、その有り様も変わります。

**古在** そうですね。80年代以降は、



施設園芸農家も稲作農家と変わらなくなりましたね。うれしさがある反面、私の役割、存在意義をあらためて自問自答しましたよ。それで、途上国での農業技術普及などにも関心が広がっていきました。

昆 さて、私も農家が豊かになっていく過程を見てきましたが、先生にお聞きしたいのは、そのような発展の歴史を踏まえて、先生の目に映る日本社会の中での農業の姿です。どのようにとらえていますか？

古在 農業への期待は大きくなってると、私は思いますよ。ロハスとあって、実利ではなく雰囲気求めて自然とのかかわりが持てる田舎暮らしを始める人、都会でも自動車に乗ることよりも自転車に乗る生活の

方がかっこいいと思う人が出てきているように、合理性とか物質的豊かさとは異なる志向を求める人たちが増えていますよね。

昆 私は、人間が有史以来飢え続けてきた段階を抜け出て過剰の時代に突入したのではないかと、実は文明が転換期を迎えたと考えているんです。にもかかわらず、社会の病理が、それこそ農業を含めて、過剰の論理だけで解決されようとしており、それによってまた問題が複雑になっていくのではないかと思うんです。

古在 壮大な話ですね。ただ、日本においてはそのようなことが言えるかもしれないですが、世界各国を見渡せば、飢えに苦しんでいる人々がいるわけです。ですから、昆さんがおっしゃるところの過剰、それゆえの病理が日本にあるのであれば、欠乏しているところに分け与えることで、解決されるような問題なのではないでしょうか？ もちろん、単に日本が貧しい国に食料を供給すれば解決できるというような意味ではありません。しかし様々な形で、かわり合いを持つことによって、過剰の状態から脱却していけると思うのです。

昆 ただですね、人々は一度便利さや快楽を経験するとやめられないように、ただ減らせばいいという話で

はないですよ。今よりも貧乏になるのを望むことはありえないように思うんです。時として不便さを味わうことは望んだとしても。

古在 その点については、私と昆さんとは見解が異なりますね。やっぱり価値観がまったく違う人がいる以上、言い切るのは問題かなと思います。しかも、先ほど述べたように物質的価値ではないものを求める人が増えてきています。農家の中に、自分の人生の喜びを売り上げや収入ではなく、田んぼにカエルがいる環境に喜びを見出す人もいるわけですし、農薬・肥料メーカーだって自社の利益だけを考えるだけでは行き詰まっているじゃないですか。

昆 ええ。

古在 自分にとって何が幸福なのかを問い直し、実践している人々が増えているということなのです。私自身もそうです。大多数の人間が求める価値観とは違うものを求める人々はいらるわけですから。

昆 なるほど。私は大多数の人々の価値観は変わらないんじゃないか、農業の世界では変えていくべき役割を担っている人が変えていくしかないという考えですので、その点では先生と私の意見では相違がありますね。ただ、それぞれに見つめる社会の変化の中で、農業に求められる役



「幸せの種」はきっと見つける (祥伝社)

古在教授の自叙伝。少年期における過酷な社会的差別と経済的困窮の中で「求めない、恨まない、挫けない、怯まない、そして、急がない」(サブタイトル) ことで、自分の夢に向かって歩き出す姿を描き出した描写は胸を打つ。1,680円(税込)。

割も、同様に変わっていかなければいけないという意見では、同じではないでしょうか。

たとえば、本誌読者が行なっている直売所や体験農園がそうです。先生が現在所属する環境健康フィールド科学センターにおいて、農業・医療・環境など学問の垣根を越えて研究がなされているというのも、時代の変化に呼応した形での新たな農業を模索されているからこそなのだと思えます。

古在 確かに、それについては私も異論がありません。また、これから農業をいい方向に変えるために

は、これまでタブーとされたことを見直すべきでしょう。農家への批判も、してはいけないのもタブーのひとつですが、農家、農業の健全な発展のためには、何が正しくて悪いのか、見直す必要があるでしょうね。昆 同感ですね。

### 辛さの中で体得した 現実を受け入れること

昆 さて、著書『「幸せの種」はきっと見つかる』は反響も大きいそうですね。タイトルに込められた思いを教えてくださいませんか？

古在 私は誰もが幸福感を得られると思っています。しかし、多くの人はそうとは思っていません。学生でも試験に失敗しては落ち込み、失恋しては悩む。でも、別の角度から見れば、貴重な体験ではないですか？ 人生の最終的な目標を達成するには必要なのではないですか？ ということを本書を通じて伝えようと思いました。

昆 現実を受け入れた上で「自分がやりたいこと、できることを考える」という記述が印象的です。

古在 若い人は、幸せになるために、小さい不幸を避けながら人生を歩いているという気がします。非常に憶病になってしまっている。しかし、

他人の評価を気にするから自分が傷つくのであって、現実を受け入れてしまえば、可能性が広がると思うんです。世間的には不幸といえる私の経験も、今となっては私の財産となつていきます。学者になったのも、失敗と偶然の産物でしたからね。

昆 どんなゴミでも堆肥になるように人生に無駄はない、と。

古在 年寄りの小言は言うまいと思つていたのですが(笑)、学生など若い世代を中心に反響があり、驚いています。

昆 あえて申し上げますが、多くの農家は被害者意識に凝り固まっています。しかし、事業が成功するかどうかは別としても、自分の人生を生きたという手応えを得るのであれば、その人は幸せだし、きつと死ぬ直前には「自分の人生はよかったなあ」と思えるはずなんですよね。

古在 人生の目標は「●●になる」「△△を手にする」と具体的であるよりも、「〜したい」というようにやや抽象的な欲求の方がいいのではないのでしょうか。実現しやすいのと同時に、変化に柔軟に対応できると思っています。ぜひ読者のみなさん、特に悩んでいる方に、自身の幸せの種の存在に気づき、また伸ばし育てていっていただければと思います。昆 本日はありがとうございました。



## 古在豊樹

### ■プロフィール (こざい・とよき)

1943年東京都生まれ。67年千葉大学園芸学部卒業、69年東京大学大学院農学系研究科修士課程修了、72年同大学院博士課程修了。大阪府立大学農学部助手、オランダ政府奨学生などを経て90年千葉大学園芸学部教授に就任。99年同大学同園芸学部長就任。2005年から08年3月までから同大学学長を務める。現在の所属は環境健康フィールド科学センター(千葉県柏市)。02年には紫綬褒章も受章。専門は生物環境調節、農業環境工学、農業気象学、植物組織培養学。近著に『「幸せの種」はきっと見つかる』(祥伝社)、『ALL YOU NEED IS GREEN コザイ教授とツギハラ社長が考える「環境と貧困」』(講談社)がある。なお、父はマルクス主義哲学者・古在由重氏、祖父は農学者・古在由直氏。